

第19回ウェスレー・メソジスト学会・発題講演 (2017.9.11:銀座教会) :

## 南北戦争後の北米福音主義信仰の変容とその意義 ——

A. B. シンプソンと A. J. ゴードン]

棚村 重行

### I. はじめに : 「南北戦争」後の北米社会と宗教生活、とくに「信仰復興運動」の変貌

A. 「第二次大覚醒運動」(「小都市とフロンティアの信仰復興」)から、「第三次大覚醒運動」(「大都市と産業社会の信仰復興」)へ

そもそも、「信仰復興運動」とは、キリスト教史においては、どのような運動であったのか？ヨーロッパ・キリスト教史の視点から見ると、旧大陸では国教会体制を基本とした「制度の宗教」や啓蒙主義的「理性の宗教」とは異なり、十七～十八世紀の「敬虔主義」運動に発する「心の宗教 (The Religion of the Heart)」運動の形態を取った運動である<sup>1</sup>。

だが、旧大陸の伝統的な国教会体制を維持しえなかった「広大な空間の国」の新大陸 (S.E.ミード) で開花した「心の宗教」の運動は、「信仰復興運動 (Revival Movements)」,あるいは「大覚醒運動 (the Great Awakenings)」と呼ばれた。北米の宗教史家たちによれば、これらの諸運動の時期は、植民地時代から二十世紀

まで、新大陸では三期ないし四期存在したといわれる。それらは、以下の通りである : 1. 植民地時代の「第一次大覚醒運動」(1730s~40s) ; 2. 西部開拓時代の「第二次大覚醒運動」(1790s~1830s) ; 3. 南北戦争後の大都市化・産業化時代の「第三次大覚醒運動」(1870s~1900) [ ; 4. 第二次大戦後の「戦後リヴァイヴアル」(1945~1960年代)を加える S.E.オールストロームのような研究者もいる]<sup>2</sup>。

さて、本稿で扱う北米の「信仰復興運動」を背景としたその神学思想運動の研究は、オールストロームの時期区分論を踏まえ、十九世紀前半の第二次大覚醒運動を導いた二人の信仰復興運動指導者、C.G.フィニーと、D.D.ウィードンに言及しつつ、十九世紀後半の第三次大覚醒運動を推進してきた二人の指導的牧師、A.B.シンプソンと A.J.ゴードンの「神学思想」に関する比較思想史研究を試みる。この研究を通し、とくにシンプソンとゴードンの信仰思想上の諸特徴を浮き上がらせ、それに評価を与え、今後の研究の方向についてその意義と諸課題を提起したい。

### B. 「福音主義 (Evangelicalism)」とはなにか？— 一定義の試み

新約学者 O. クルマンは、彼の名著『キリストと時』のなかで、新約の思想構造を「キリスト教普遍思想」と呼び、以下の図式で明快に提示した : 「創造—人類 [最初のアダム : 棚村] —イスラエル—遺りの者—一人の人 [最後のアダム・キリストと十字架の代理贖罪 : 棚村] —使徒—教会 [キリストの身体 : 棚村] —新しき創造」<sup>3</sup>。これを筆者なりに再編成すれば、①「福音」[一人の人 = 最後のアダム・キリストと彼の十字架の代理贖罪] + ②「キリスト教普遍思

<sup>2</sup> S.E. Ahlstrom, *A Religious History of the American People* (New Haven and London: Yale Univ. Press, 1972), 350-356.

<sup>3</sup> O.クルマン、前田護郎訳、『キリストと時』(岩波書店、1954)、176頁。クルマンの「キリスト教普遍思想=福音+救済史+キリストの身体なる教会」を支える歴史的基礎体験として、例えば I コリント 15:1-11 のエルサレム教団に遡る古い伝承の証言内容を見よ : ①主の贖罪・復活・顕現の福音+②ヘブライ聖書の預言の成就 (旧新約にわたる救済史的展望を開く) +③ケファと弟子らと復活の主との出会いによるエルサレム教団の再結集。このテキストが、彼の救済史展望の核心を提供したに違いないと、私 (棚村) は考えている。

<sup>1</sup> T.Campbell, *The Religion of the Heart; A Study of European Religious Life in the Seventeenth and Eighteenth Centuries* (Columbia; University of South Carolina, 1991),3.

想（旧新約を貫く集合人格史観の救済史〔創造—人類—イスラエル—遣りの者—一人の—使徒—教会—新しき創造〕）+③「神の民共同体」とまとめることが可能であると思う。この棚村が再編したクルマン説をもとにして、本稿では、聖書正典が証言する「原（プロト）福音主義」とは、①キリストの救いの告知＝福音信仰（キリストの人格とみわざによる救い）+②上記の救済史的歴史理解+③集合人格なる神の民、キリストの身体なる教会形成運動<sup>4</sup>と要約したい。

そのうえで、教会史のなかの聖書正典の証言に基づく「原福音主義」を踏まえた信仰思想運動として「福音主義」運動＝①特定の「福音」理解+②救いの歴史観+③教会観という三要素の複合体と考えるのが便利であろう。この「福音主義」の定義をキリスト教史・教会史研究にも応用して、本講演では時期的に、i. 「宗教改革的（公同的）福音主義」（16-17 世紀）、ii. 「近代的福音主義」（18～19 世紀前半）、iii. 「現代的福音主義」（19 世紀後半～現代）と三区別して、以下の論述で使用することにしたい。

## II. 回顧：「フロンティアの信仰復興」期の信仰思想の変貌：『のみ』の神学から『と』の神学へ：C. G. フィニーと D. D. ウィードンのケース：救済論の「急進的アルミニウス主義化」と教会論の解体

### A. 「のみ」の神学の継承：17～18 世紀の英国「ウェストミンスター信仰告白」（1646）と、メソジスト「宗教簡条」（1784）の北米移植

<sup>4</sup> クルマン説を下敷きにして、本講演では、以下のように「原福音主義」を定義する：①「キリストの受肉・贖罪・復活・昇天による救い」を告げる「福音」信仰に立ち、②「キリスト教歴史観」としては「多数から一人（最後のアダム・イエス・キリスト）に向かうイスラエル—遣りの者という旧約の運動と、イエスから新たなイスラエルという多数へ向かう新約の運動からなる救済史」を仰ぐ。③共同体としては、近代的個人連盟ではなく、「集合人格的」な「神の民」「キリストの身体」「祭司の国」たる教会形成運動体と要約できる。以上の見解は、棚村の「福音と福音主義（一）」『神学 77 号』（東京神学大学神学会編、2015）の 47-48 頁参照。

まず最初に、英国圏における「宗教改革的福音主義」運動の代表の二例として、改革派—ピューリタン—長老派、会衆派、バプテスト派の基本的な信仰告白を提供した「ウェストミンスター信仰告白」と、英国教会内の信仰復興運動として発足した J. ウェスレーらによるメソジスト監督教会の「宗教簡条」に注目して、その信仰思想を分析してみよう。

1. 「ウェストミンスター信仰告白」（以下「ウ告白」と略：改革派—ピューリタン—長老派神学）〔＝十九世紀前半の北米の長老派では、「ウ告白」の信仰思想運動を、「旧派カルヴァン主義（Old School Calvinism）」と呼ぶ〕

#### a) 救済史—救いの福音—教会と終末論

##### ① 予定と創造、墮罪論：

「ウ告白」では、神の無条件的な二重の聖定により、神は、ある人々を「永遠の死」へ、他の人々を「永遠の命」に予定していると理解している<sup>5</sup>。そこから、神の創造のさいに人類は善なるものとされたにもかかわらず、最初の人アダムの墮罪以後は、その「原腐敗」の継承とともに、人類はそれぞれの個人的な道徳的決断による責任となる「現実罪」をも犯ざるをえない罪人たちであると理解する<sup>6</sup>。その意味でこの二重性をもつ罪観は「宗教改革的福音主義」の信仰思想の根底にあるものを示している。

##### ② 「時の中心」なるキリストによる救済論：

では、救済史におけるキリストの役割とはなにかを問われれば、こうなる：人類が背負った原罪・道徳罪の負荷は、「彼（キリスト）により贖われ、召命を受け、義とされ、聖とされ、栄光を与えられる一つの民」とされた<sup>7</sup>。そのキリストによる救いの道は、以下の通り展開される：i) 有効召命→ii) 義認→iii) 子とされること→iv) 聖化。救いは、

<sup>5</sup> 松谷好明訳『改訂版 ウェストミンスター信仰基準』（一麦出版社、2004）、24 頁。

<sup>6</sup> 上掲書、35 頁。

<sup>7</sup> 上掲書、47 頁。

こうした諸段階を踏んで展開するという<sup>8</sup>。

③教会と終末論：

教会は福音の正しい説教と「恵みの契約、証印」としての洗礼と聖餐を執行し<sup>9</sup>、終末の審判と救いの完成を待つことが使命とされる。

b) まとめ：

以上をまとめると、徹底的な無条件的二重予定論に立つ「キリストの恩寵のみ」による有効召命—義認—子とされること—聖化の救済の道を強調している。こうした救済が起こるのは、福音の正しい説教と洗礼と聖餐が執行される「しるし」をもった「キリストの身体」「神の民」なる教会共同体のみにおいて、である。だから、改革派—ピューリタン—長老派系の救済論の特徴は、徹底的な二重予定説に立つ「宗教改革的福音主義」の「のみ」の神学とまとめることができるであろう。

2. メソジスト「宗教箇条」（以下「宗教」と略：英国教会—北米メソジスト監督教会）

a) 救済史—救いの福音—教会と終末論

J. ウェスレーは、英国からの独立を達成し、独立した教派教会としての北米のメソジスト監督教会のために、英国教会の「三十九箇条」を編集・作成し直した。その結果、彼は24箇条(1784)にまとめて、新大陸で組織化されたかの教会へ送付した<sup>10</sup>。間もなく、1箇条を加え25箇条の「宗教箇条 (The Articles of Religion)」となり、新大陸におけるメソジスト教会の教派形成と伝道に資することとなった<sup>11</sup>。以下は、「三十九箇条」（以下「三十九」と）と「宗教箇条」（以下「宗教」と略）を比較しつつ、諸

要点を述べたい。

①予定と創造、墮罪論：

「宗教箇条（以下、宗教）」には、とくに予定論についての告白はないが、「三十九箇条」では「救いに予定された者」の一重予定論を告白する<sup>12</sup>。この予定論は、改革派—ピューリタン系の「二重予定」論と大きく異なる。加えて、「宗教」の第七条では、原罪と現実罪の区別という見解を継承している<sup>13</sup>。その意味で、ここでの罪観も「ウ告白」と同様に、「宗教改革的福音主義」の線を保持している。

②「時の中心」なるキリストによる救済論：

救済論の根拠については、キリスト神人両性と贖罪論の強調している<sup>14</sup>。その上で、展開される救済の過程論は、以下のように要約される：i) 先行の恵みによる信仰のみによる義認→ii) 聖化では、罪赦されし自由意志と協働の恩恵による見解が表明される<sup>15</sup>。この聖化過程における神人協力説的な展開が、改革派—ピューリタンの見解と異なる英国教会—メソジスト監督教会の特徴となる。論者は、「恩寵のみ」による義認論+「協働の恩寵」と自由意志による「聖化」を救済過程とする見解を「穏健なアルミニウス主義」と呼ぶ。だから、改革派—ピューリタンの（二重）予定—召命—義認—子とされること—聖化の全過程が「主権的恩恵のみ」により導かれる見解と区別できる救済論的特徴と言えるのである。

③教会と終末論：

最後に、「宗教」では、教会は、福音の純粋な説教と正しく執行された洗礼、聖餐の聖礼典をみえるしるしとする<sup>16</sup>。その意味で、英国教会—メソジスト監督教会も、ルター派や改革派—ピューリタンの「ウ告白」

<sup>8</sup> 上掲書、53-59頁。

<sup>9</sup> 上掲書、109-112頁。

<sup>10</sup> Henry Wheeler, *History and Exposition of the Twenty-Five Articles of Religion of the Methodist Episcopal Church* (New York, Eaton and Mains: Cincinnati, Jenkins and Graham, 1908), 8.

<sup>11</sup> J.H. Leith, ed., *Creeeds of the Churches; A Reader in Christian Doctrines from the Bible to the Present* (Atlanta: John Knox Press, 1963, 3<sup>rd</sup>.ed., 1983), 'The Articles of Religion', 354-357. 以下、CCと略す。

<sup>12</sup> 'XVII. Of Predestination and Elecion,' in Leith, CC, 'The Thirty-Nine Articles of Religion', 272.

<sup>13</sup> 原罪と現実罪論についての見解は、CC, 356.

<sup>14</sup> Ibid., 354.

<sup>15</sup> Ibid., 356.

<sup>16</sup> Ibid., 357.

と共通の教会論に立っている。但し、「宗教」の聖餐論は、ルター派の共在説ではなく、改革派に近い「恩寵の確実な印」論を主張している<sup>17</sup>。

b) まとめ：

以上の「宗教箇条」の特色を総括すれば、以下のようになる。①「宗教箇条」には、英国教会のような一重予定説の告白はない。その代り「三十九箇条」と共通して、②墮罪論は、原罪・現実罪の見解を継承する。だが、救済論的には、キリストの神人両性とキリストの恩寵にもとづく、i)「信仰のみによる義認」→ii)協働の恩寵と自由意志の協力による聖化・完全を強調する。③教会論においては、ルター派、改革派、英国教会と共通して、福音の説教と洗礼・聖餐の正しい執行をししとする教会を信じる。

こうして、英国教会—メソジスト監督教会の義認の思想は、「のみ」の神学、聖化は「と」（神人協力）の神学とする点で、ルター派や、改革派—ピューリタン系諸派の救済観とは異なる。そこで、各宗教改革的福音主義のルター派、改革派—ピューリタン諸派と区別する意味で、英国教会—メソジストの宗教改革的福音主義神学は、「穏健なアルミニウス主義」の救済観と呼ぶことができる。

ただし、注意したいのは、メソジストの救済論は、義認は「のみ」の神学、聖化は協働の恩恵と罪赦された自由意志の協力とする「と」の神学という点である。それは、義認も聖化も「と」の神学とする十九世紀に北米で登場する「急進的アルミニウス主義」とは決定的に異なっている点である。そこで次に、北米の十九世紀前半の「第二次大覚醒運動時代」に展開してゆく信仰思想運動に目を移して考察しよう。

#### A. 「のみ」の神学から、義認も聖化も「と」の神学へ：19世紀の北米の「フロンティアの信仰復興」運動における「急進的アルミニウス主義(別名：神人協力説)神学」の勝利

チャールズ・G・フィニーは、もともと長老派所属の法律家志願者であったが、回心後は職業的信仰復興運動家となった。彼は、極めて道徳主義的な「急進的アルミニウス主義」神学に立つ福音理解により、第二次大覚醒運動の実践的・神学的指導者、社会改良家としても、その時代には大活躍をした。

次に、若き日にフィニーから感化をうけ、「メソジスト監督教会のフィニー」とも称された、D.D.ウィードンという神学思想家に注目したい。両者をつなぐ信仰思想は、信仰復興運動への強烈な関心であり、信仰思想上の「急進的アルミニウス主義」であった。このフィニー—ウィードンの救済論思想は、やがて北米メソジスト監督教会の牧師養成機関での標準神学テキストの救済論にも採用された。その結果、初期の青山学院神学部で学び、かつ教えた本多庸一、山田寅之助ら、明治期日本のメソジスト監督教会の伝道を推進してゆく主導思想となった。

#### 1. C.G. フィニー (1792-1875) における道徳的統治と神人協力説的な「近代的福音主義」の登場 (北米ではフィニーとその仲間の神学を「新派カルヴァン主義 (New School Calvinism) と呼ぶ)

a) フィニーの『組織神学講義』(1846)における救済史—救いの福音—教会論なき信仰復興運動

①神の道徳的統治とアダムの道徳的墮落説：

フィニーの神学的世界観には、スコットランド啓蒙哲学の影響による道徳主義的世界観の感化が強烈である。これによると、創造者なる神は、「道徳的統治者」なる創造者と呼ばれた。とくに、神がモーセを介して、民に与えた十戒をはじめとする「道徳的律法」に基づく「神の道徳的統治」に参与する人間の道徳的使命がひととき強調された<sup>18</sup>。そのために、「ウ告白」や「宗教箇条」で教えられている、最初の人アダムによる「原罪」と「現実罪」の区別と継承が消え、道徳律法に違反するという「道徳的墮落」

<sup>17</sup> Ibid., 357-8.

<sup>18</sup> C.G.Finney, *Lectures on Systematic Theology*, vol.1 (originally, 1851; Fenwick, MI: TruthInHeat. com. repr., 2002), 52.

のみが強調されるにいたった<sup>19</sup>。こうして、十九世紀の後半になると、北米の信仰思想においては、ヘブル的な「集合人格的」世界観が解体され、それに比例して罪観の個人主義化が進み、信仰思想の性格が道徳主義化する傾向が顕著となった。

②「時の中心なるキリスト」による救済論：

フィニーにとって、キリストの贖罪事業の意義は、「道徳的律法」の実現を阻む人類の「道徳律違反」の罪を贖うことに他ならない<sup>20</sup>。その贖罪にもとづく神の道徳的統治回復とそれへの人間の協力的参与の過程は五段階を踏みゆくものとされた：i)「再生 (regeneration)」<sup>21</sup>→ii)「悔い改め (repentance)」<sup>22</sup>→iii)「信仰 (faith)」<sup>23</sup>→iv)「義認 (justification)」<sup>24</sup>→v)「全面的聖化 (entire sanctification)」<sup>25</sup>というふうに、である。

③教会論なき終末論：

フィニーは、彼の『組織神学講義』のなかで、「近代的福音主義」の神学著作の文学的形態をとる。だが、その組織神学上の最大の特徴は、教会論と関連諸教理（聖礼典論、職制論、教会制度論など）の記述がほぼ欠落しているという事実である。フィニーの終末論については、二次的研究情報では「再臨・千年王国後説 (postmillennialism)」と指摘する研究者がいる<sup>26</sup>。

b) まとめ：

フィニーの神学は、北米の建国期に流入した合理主義的な「スコットランド常識哲学」の圧倒的影響で、神は道徳律法の実現を求める道徳的

統治者とされた。そこで、五段階の救いの過程を経て、人間は道徳律法秩序を樹立する神の協働者に変化させられた。

フィニーにおいては、救済論神学は、第二次信仰復興に役立つ「(神と人)と」の協力神学となり、教会形成の土台（教会論、聖礼典論、職制論）は解体され、道徳主義化、個人主義化の傾向が著しかった。要は、急進的なアルミニウス主義の救済論を中核とした「近代的福音主義」へと変質させられていたのである。

注目すべきは、彼の信仰思想の救済過程論で、義認よりも全面的聖化が目的となり、罪の赦しは「義化」の出発点に過ぎなくなる。「宗教改革的福音主義」以上に、このフィニーらの「近代的福音主義」の方が、トリエント公会議以後のカトリック的義化論の救済論へどんどん似ていくのは、なんという歴史の皮肉であろうか！

2. D. D. ウィードン (1808-1885) にみるフィニー的な「急進的アルミニウス主義」のメソジスト受容：『メソジズムの教義』(1862)

a) ウィードンの『メソジストの教義』にみる救済史—キリストの福音——教会と終末論

①神の道徳的統治とアダムの道徳的墮落説：

ウィードンによれば、道徳的統治者なる神は、被造物の自由を配慮しつつ「道徳的統治」をもって被造世界を支配する<sup>27</sup>。だがアダムの墮落により、アダムなる「個人格」は「道徳的墮落」の責任を負うにいたった<sup>28</sup>。

②「時の中心」なるキリストによる救済：「無限定的贖罪論」と「急進的アルミニウス主義」

そこで、ウィードンは、改革派ピューリタン—長老派の二重予定説を前提とした限定的贖罪論に反対し、すべての人の罪の贖いのためのキ

<sup>19</sup> Ibid., 498.

<sup>20</sup> Ibid., 441.

<sup>21</sup> Ibid., 548.

<sup>22</sup> C.G.Finney, *Lectures on Systematic Theology*, vol.2 (originally, 1851; Fenwick, MI: TruthInHeat. com. repr., 2002), 695-696

<sup>23</sup> Ibid., 708.

<sup>24</sup> Ibid., 726-727.

<sup>25</sup> Ibid., 898.

<sup>26</sup> W.C. McLoughlin, *Modern Revivalism : Charles Grandson Finney to Billy Graham* (Eugene, Oregon: Wiph and Stock Publishers, 1959), 23-25, esp., 24.

<sup>27</sup> Whedon, 'Doctrines of Methodism,' in J.S. Whedon and D.A. Whedon eds., *Essays, Reviews, and Discourses by Daniel D. Whedon, D.D., LL.D.*, (New York and Cincinnati: Philips & Hunt and Granston & Stwoe, 1887; repr. Amazon Books), 114.

<sup>28</sup> Ibid., 120-121.

リストの「無限定的贖罪論」を協力を主張・鼓吹した<sup>29</sup>。それにともない、キリストの贖罪による救済過程については、以下の見解を展開した：すべての救済の諸段階で、必ず「悔い改めと信仰」に基づき、  
i) 義認→ii) 再生<sup>30</sup>→iii) 全面的聖化にまでいたる道である<sup>31</sup>。

③教会論と終末論：

注目すべきは、ウィードンの論文にも、フィニーと同様に、教会論や終末論の展開はない。その点でも、ウィードンは彼の師フィニーに類似していると判断して差し支えない。

b) まとめ：

こうして、ウィードンが、フィニーの「神の道徳的統治論」と「道徳的墮罪論」を継承し、反改革派的二重予定論のメソジスト的立場から「無限定的贖罪論」を強調した。だが、フィニーの救済論よりもシンプルな「悔い改めと信仰」による義認→再生→全面的聖化を主張している点は、見逃してはならないメソジスト的な彼の特徴であろう。

こうして、ウィードンの神学的な意義は、「スコットランド常識哲学」の感化を受けたフィニー主義神学を、その後のメソジスト監督教会に導入したことである。そのために、「宗教箇条」の「義認は『のみ』、聖化は『と』の神学」から、「聖化—再生—全面的聖化」へと進行し、救いの全諸段階が「罪の悔い改めと信仰」をテコに進んでゆくオール『と』の神学へと転換された。そのウィードン神学は、北米メソジストの組織神学者、M. レーモンドの神学テキストから、初期の青山学院神学部教授・本多庸一や、山田寅之助などにも及ぶ<sup>32</sup>。

Ⅲ. 南北戦争<sup>33</sup>後の「大都市の信仰復興」のために（Ⅰ）：A. B. シンプソンの「四重の福音」に基づく「全き聖化と癒し」の信仰思想と著作の文学形態

A. A. B. シンプソン(1843-1919)とその時代

a) 生涯の略歴：

シンプソンは、両親がスコットランド系アイルランドからのカナダ移民であったが、彼自身は長じて米国へ移住し長老派の牧師として奉仕をした。

一伝記著者(Dana L. Robert)によると、シンプソンの最初の転機は1874年で、この年に、改革—長老派の信仰に聖潔思想が加わり、聖霊の充溢体験に満たされたという。さらに、1881年には(聖霊の)全浸礼を受ける体験をし、心臓病の「信仰—治癒」の経験したという<sup>34</sup>。その後、ニューヨークの長老派教会を辞し、伝道、病気の癒し、孤児院、移民援助などの超教派的な事業を展開した。また中国や世界伝道のための聖書学院建設し、1887年に超教派的教派「キリスト教伝道同盟(the Christian and Missionary Alliance(以下C&MA)の創立指導者となり、「四重の福音」の信仰思想を形成・実践していった。

b) 文献について：

—明治期メソジスト山田寅之助における信条と神学(二)』『神学78号：宗教改革の意義とその発展』(東京神学大学神学会、2016)、24-51頁参照のこと。

<sup>33</sup> 南北戦争(1861-65)の原因については、奴隷制問題の背後にある北部の工業立国路線と南部の農業立国路線の決定的対立を軸に発生した事情を考慮すべき。だから南北戦争後は奴隷制は廃止され産業化立国の路線のなかに南部・西部も組み込まれてゆく：長田豊臣「第4章 南北戦争と再統一」、有賀貞他編『新版概説アメリカ史—ニューワールドの夢と現実』(有斐閣選書、1992)、82-106頁参照のこと。

<sup>34</sup> An article 'Simpson, A.B.,' written by Dana I. Robert in G.H. Anderson, ed., *Biographical Dictionary of Christian Missions* (Grand Rapids, Michigann: Wm. B. Eerdmanns Publishing Co., 1999), 622.

<sup>29</sup> Ibid., 131.

<sup>30</sup> Ibid., 136.

<sup>31</sup> Ibid., 142.

<sup>32</sup> フィニー主義はウィードンを介して第二次大覚醒運動期のメソジスト神学の一部となった。更に十九世紀後半にはM.レイモンドのメソジスト神学の教科書でこの派の神学の基準とされ、このテキストから組織神学を青山学院神学部で学んだ最初期の日本メソジスト監督教会牧師で青山学院神学部教授、山田寅之助の神学思想となったと考えられる。このレイモンドと山田の思想的関係の論証は以下の拙稿を参照：棚村重行『『宗教改革なきプロテスタンティズム』受容の功罪—

以上、シンプソンの信仰思想の形成にとって重大なことは、①改革派—長老系のキリストの贖罪による赦罪の経験という素地の上に、②聖潔の経験が加わり、③聖霊の全浸礼の経験、病気からの治癒、④再臨—千年王国前説の希望が加えられたことである。とすれば、シンプソンとペンテコステ派の関係は、影響と共に緊張関係もあるデリケートで重要な問題である<sup>35</sup>。そこを考慮しつつ、「四重の福音」系内の教派やグループの共通点と対立点を、研究者は共に注目すべきであろう。

## B. シンプソンの『四重の福音 (The Four-fold Gospel)』の「近代的福音主義」の構造の分析<sup>36</sup>

a) 本書の文学構成的構造とテーマ：

シンプソンの著作の文学的な構成に注目すると、この神学的著作の主要なモチーフと編成を素早く把握することができる。以下が著作の基本構成である：I. われらの救い主キリスト<sup>37</sup>→II. われらの聖化者キリスト<sup>38</sup>→III. われらの癒し主キリスト<sup>39</sup>→IV. われらの来るべきキリスト<sup>40</sup>。

<sup>35</sup> Ibid., 622: 「ペンテコステ派が二十世紀初期に台頭すると、C&MA は多くの支持者と伝道者を失ったが、それはシンプソンが異言で語ることは救済に必要であると語るのを拒否したから」。

<sup>36</sup> A.B.Simpson, *The Four-fold Gospel*, New York: The Christian Alliance Publishing Company, 1890, 3<sup>rd</sup>. ed を使用。以下、*Four-fold* と略す。

<sup>37</sup> 更に細かい節の区分けは以下の通り：1.それは何から救うのか；2.救いは我らに何をもたらすのか？；3.これらの 祝福が生じるプロセス；4.救いが受け入れられる諸段階；5.聖書が救いについて語っている事柄；6.なぜそれは良きおとずれの福音と呼ばれるのか；7.この救いを受けとり、渡すように勧誘すべき諸考慮。

<sup>38</sup> 1.それは何でないのか；2.聖化とはなにか；3.聖化の源泉；4.いかにしてそれ（聖化）は受け取られるのか；5.実践的な諸段階。

<sup>39</sup> 1.どのような神的癒しがそうでないのか；2.なにが神的癒しなのか；3.いかにしてイエスはわれらの癒し主なのか？

<sup>40</sup> 1.キリストの再臨ということで、われらは何を意味しているのか；2.千年王国ということでわれらは何を意味するのか；3.これら二つの出来事の秩序：キリスト

ここで補足すれば、シンプソンの著作がキリスト論的な視点で各章の主題を選び展開されるのに対して、北米で「四重の福音」の影響を受けた中田重治の場合は、すぐれて救済論的議論を中心に構成されていることが、両者の思想的な相違点であろう。

b) まとめ：シンプソンの『四重の福音』の文学的特徴：

①「宗教改革的福音主義」の神学、例えば「ウ告白」や「宗教箇条」は、諸教会共同体の聖書正典に服する準規範的な「信仰告白」として果たす働きが重要である。「近代的福音主義」のフィニーの見解は、一応「組織神学著作」の形で議論を展開する役割が強い。「現代的福音主義」のシンプソンの神学的著作は、「大都市・産業社会の信仰復興家」として、個人救済的な大衆向けの「信仰パンフレット」形態をとり、かなり成功を収めたと考えられる。

②文学的構成から神学思想的な構成を見ると二つの特徴をもっていた。i) キリストの役割を四重のキリスト論的な救済論、「救い主」「聖化者」「癒し主」「(再臨・千年王国前説的) 来臨者」とする「キリスト中心主義」的な傾向である。次に、ii) クルマン的救済史観をシンプソンは継承せず、切迫した黙示文学的千年王国説終末論（再臨・千年王国前説）の視点を導入する。この点で、むしろセクト的な黙示文学的な終末論的視点に傾斜していたといえよう。

## C. シンプソンの「現代的福音主義」思想の意義と評価：

a) 『四重の福音』における救済史の展望—キリストと救いの福音—教会と終末論の構造

①「四重の福音」では、救済史の旧約と創造—アダムの墮落—イスラエルの歴史における再臨・千年王国前説的な終末待望が強い。

②キリストの「四重の福音」：

i) 「救い主キリスト」：「それは神の眼差しにおける義認をわれらにもた

の再臨は千年王国に先んじるのか、それとも後に続くのか？；4.諸反論；5.主の再臨のしるし；6.彼（イエス）の再臨の祝福；7.それが残した諸教訓。

らし、われらは義なる存在として神の前に立つ」という<sup>41</sup>。すでに指摘したように、キリストの赦罪の福音と信仰との関係については、フィニーやウィードンと連続していて、「神と人との神人協力説」的なモチーフを継承している事実である<sup>42</sup>：「すべての人の救いは、その人の選択と自由意志にかかっている (every man's salvation is hinged upon his own choice and free will) という事実のゆえにである」<sup>43</sup>。シンプソンにおいても、第二次大覚醒運動で支配的となった「急進的アルミニウス主義」(急進的 神人協力説) の影響が継続していることがわかる。

ii) 「聖化者キリスト」:

「聖化とは神への献身を意味する。…それは罪からの分離と神への献身である」<sup>44</sup>。ほぼ「全き聖化」の教理を思い起こさせるほどに強い強調がなされている。

iii) 「癒し主キリスト」:

「神的癒しがわれわれのもとに到来するのは、死者のなかからご自身の身体において復活されたイエス・キリストを通してである」<sup>45</sup>。主イエスによる病気かあ癒しの事実もまた、シンプソンの重要な教理の柱の一つであった。

③終末論：「再臨・千年王国前説」: iv) 「来るべきキリスト」

「何の問題もなく、ここでは主の再臨は千年王国に先行し、それを導入する (the coming of the Lord precedes and introduces the millennium)」<sup>46</sup>。要は、キリスト中心的・切迫した再臨・千年王国前説型伝道運動体の登場している。だが、フィニー、ウィードンと同様に、「宗教改革的福音主義」が強調する、福音の説教と聖礼典の執行を中心とした「キリストの神秘体」、「旅する神の民」の形成への構想が十分に回復されていないことに留意すべきである。

<sup>41</sup> Simpson, *Four-fold*, 17.

<sup>42</sup> Ibid., 27: 「救いは悔い改めによってくる。罪からの転向がなければならない」。

<sup>43</sup> Ibid., 34.

<sup>44</sup> Ibid., 55.

<sup>45</sup> Ibid., 99.

<sup>46</sup> Ibid., 122

b) まとめ:

シンプソンの経歴は、第二次大覚醒運動の背景である「地方都市とフロンティア」ではもはやなく、世界有数の産業・商業・移民の大都市ニューヨークが象徴した「大都市と産業社会での信仰復興」という社会的文脈である。だからこそ、福音伝道や信仰復興の課題と共に、大都市と産業社会固有の「疾病」からの癒しや、社会的ミニストリーの展開の必要性を自覚し、信仰思想の構築課題として注目していることも確かである。そこで、「大都市の信仰復興」では、大衆的な「信仰パンフレット」型の『四重の福音』を出版・配布し、それなりの成功を収めていることを、我々も忘れてはならない。

だが、フィニー以来の道德主義的・個人救霊的で「神人協力説的救済論」や「教会論なき伝道論」の欠点は、いくら強調してもしすぎることはないと思われる。その意味で、こうした第二次、第三次大覚醒運動の「個人救霊」への集中を乗り越えて、「キリストの神秘体」としての教会的ミニストリーの新発見と強調を証言しているのが、A. J. ゴードンという牧師神学者の著作である。最後に、この牧師の新たな「高教会的教会論神学」の登場とその神学的営為の意義を考察してみたい。

#### IV. 南北戦争後の「大都市の信仰復興」のために(Ⅱ): 「み霊—キリスト神秘体形成」の神学: A. J. ゴードンの『み霊の務め (The Ministry of the Spirit)』<sup>47</sup>の文学構成と信仰思想

A. A.J.ゴードン(1836-1895)とその時代

a) 略歴:

ゴードンは、ニュー・ハンプシャー州のバプテスト教会の牧師の家庭に誕生した。ブラウン大学、ニュートン神学校を卒業し、歴史的な古都である

<sup>47</sup> A.J.Gordon, *The Ministry of the Spirit* (originally: Philadelphia: American Baptist Publication Society, 1894). 本講演のために使用したのは以下の版: Affordable & High Quality Paperback Book Edition, Produced by Amazon Printed in Japan.

が産業化の波も押し寄せたボストンのバプテスト教会の牧師を務める。牧会生活の危機のさいに、礼拝席に現臨されるキリストを確信し、立ち直ったという。ムーディーのノースフィールド会議・集会で、A.B. シンプソン、C.カリスらと親交を深める。特にカリスの影響と詩編 103:3 の感化により、「神的癒し」の重要性を体得し、『癒しの務め (The Ministry of Healing)』(1882)を刊行した。この神癒の経験は、シンプソンのそれに似ている。

晩年には、本講演で取り上げる『み霊の務め (The Ministry of the Spirit)』(1894)を著し、三位一体なる神の配剤史 (history of divine dispensations)、特に聖霊ーキリスト配剤期における頭なるキリストとその神秘体を形成する神学を提示した。この教会論的転向こそ、個人救霊的なシンプソンとの決定的相違となる。彼が「ゴードン・コンウェル神学校」を通し北米や世界伝道従事者養成に尽力したことで知られている<sup>48</sup>。

b) まとめ：

ムーディーの諸会議や「より高き生活」運動への参与にも関わらず、ゴードンをいわゆる第二次、第の三次信仰復興運動の典型的「福音派」陣営の人物の一人と見るような通俗的な先入観抜きにすべきである。驚くなかれ、「高教会主義」の復興を目指す「バプテスト派ー高教会的キリストの神秘体形成」の神学を掲げる、A.J.ゴードンの信仰思想の意義を虚心に、かつ多面的に学ぶ必要があろうと思われる。だがゴードンの教会論的転向と到達点にどれだけ現代の福音伝道主義者が気づき、評価しているだろうか。筆者は寡聞にして聞いたことがなかった。

B. ゴードンの「み霊ーキリストの神秘体形成」の信仰思想的構造

a) 『み霊の務め』の文学構成的・信仰思想的特色：

<sup>48</sup> ゴードンの伝記情報については、以下を参照：‘Gordon,A.J.,’ by T.A.Askew in *Biographical Dictionary of Christian Missions*, ed., by Gerald H. Anderson (Wm B. Erdmanns Publishing Co:Grand Rapids, Michigan, 1999),251.この情報の欠点はゴードンの神学紹介を省略している点。‘Healing and Revival Press, Theologian of the Divine Healing Movement,’というインターネット情報には、ゴードンの体験面での情報が記され役に立つ。

シンプソンの『四重の福音』は、大都市住民向けの平易な言語で記された「信仰生活のパンフレット」で、その救済思想を流布させることをめざしていた。対照的に、ゴードンの『み霊の務め』は、かなり重厚な神学的著作で、手に取り読むものには注意深い読みが必要である。各章の冒頭には、多くの古今東西の古代教父、牧師、神学者たちの著作からの引用が掲げられている。ゴードンの思想について、今後の研究者たちは、彼独自の聖書釈義やキリスト教の古典からの引用と解釈、それらに対するゴードンの独自の神学思想の諸関係を丹念に読み解き、分析し、理解する必要がある。

b) 神学思想的なテーマに関する文学的構成：

まず、『み霊の務め』の各章のタイトルを以下で紹介し、注の部分では各章の小見出しを紹介する：

I章：み霊の時代的使命：序説；II章：み霊の到来；III章：み霊の名づけ；IV章：み霊のからだ化；V章：み霊の付与<sup>49</sup>；VI章：み霊の交わり<sup>50</sup>；VII章：み霊の統治<sup>51</sup>；VIII章：み霊の靈感；IX章：み霊の説得<sup>52</sup>；X章：み霊の昇天<sup>53</sup>。

Gordon, *ibid.*, 43-49.ここには、み霊の付与の三側面として、1.証印すること (Sealing)；2.充滿させること (Filling)；3.塗油すること (Anointing) を聖書釈義しつつ掲げる。

<sup>50</sup> *Ibid.*,55-66.ここにはみ霊が主導する神秘体と肢体における救済的過程が記述されている：1.命のみ霊：われらの再生 (The Spirit of Life: Our Regeneration)；2.聖性のみ霊：われらの聖化 (The Spirit of Holiness; Our Sanctification)；3.栄光のみ霊：われらの変貌 (The Spirit of Glory: Our Transfiguration)。

<sup>51</sup> *Ibid.*,70-80.み霊の統治については、三つの形態を説く：1.教会の務めと統治において (In the Ministry and Government of the Church)；2.教会の礼拝と奉仕において (In the Worship and Service of the Church)；3. 教会の伝道事業において (In the Missionary Enterprise of the Church)。

<sup>52</sup> *Ibid.*,95-100.み霊の説得に関しては、つなる神が以下の三つの説得 (conviction) によってキリストを栄化する。1.罪について (Of Sin)；2.義について (Of Righteousness)；3. 裁きについて (Of Judgment)。

<sup>53</sup> このX章には、更なる小見出しは付されていない。

c) まとめ：

以上の著作の文学構成からの梗概を記しておく<sup>54</sup>。次いで、短いコメントを記そう。ゴードンのこの著作は、経綸的な三位一体の配剤史の視点より、子なるキリストとみ霊なる神の配剤史における働きから、取り分けみ霊と神秘体の有機的な働きを解明した北米福音主義神学では稀な教会論的で霊的生活形成的な力のある著作である。

### C. A. J. ゴードンの「現代的福音主義」思想の意義と評価：「み霊—キリストの神秘体形成」神学の登場

a) ゴードンの『み霊の務め』における「現代的福音主義」の思想構造：創造と救済史—キリストとみ霊の福音—教会と終末論：

①救済史における旧約と創造—最初のアダムの墮落とイスラエル：

ゴードンは聖書正典を貫くヘブル的「集合人格思想」の伝統に立ち、最初のアダム—第二のアダム・キリストの対比論的な救済史観を継承している。例えば、以下の見解を参照せよ：「最初のアダムの罪によって聖霊による神の人との交わりは破損され、その結合は破れた。第二のアダムが、その十字架と復活から出現され、神の右に座したとき、その破

<sup>54</sup> 梗概：三位一体神の救済史的配剤史において、子なるキリストから聖霊なる神の配剤期を展望（Ⅰ—Ⅱ章）。キリストは慰め主（パラクレートス）として不可視的に来臨され、パルシーア（再臨）では身体的に栄化されて来る（Ⅲ章）。聖霊降臨日の意義は、個人参加型近代的自発結社ではなく、聖霊がキリストの神秘体へ内住し、肢体をキリストの内へと組織化する点にある（Ⅳ章）。み霊の洗礼の意義は、証印し、充満し、塗油すること（Ⅴ章）。聖霊とみ子（神秘体）の親しき交わりのうちに、再生・聖化・栄化されてゆく（Ⅵ章）。この神秘体の統治のために、職務者や肢体がみ霊による統治・礼拝と奉仕・伝道事業に服することが重要である（Ⅶ章）。み霊は神秘体が読む聖書に靈感を吹き込むゆえに、聖書の権威を建てるだけでなく、教義に命を与える（Ⅷ章）。み霊はキリストの三重職を受け継ぎ、神秘体において罪を裁き・義認を知らせ・裁きを示す（Ⅸ章）。み霊の働きにより、終わりの日にキリストの神秘体の諸聖徒は、空中で恍惚のうちに天的キリストに会い地上的キリストが抱かれ、キリストと栄光のうちに結合するだろう（Ⅹ章）。

れた交わりの回復が起こった」<sup>55</sup>。この発言は、ヘブル聖書的一古代教父的である。

②み霊—キリストの出来事（受肉・十字架・復活・昇天・聖霊降臨・再臨・栄化）の中心性

i) 「飼い葉おけ—キリスト」対「み霊—聖霊降臨日の二階」の予型論的歴史理解：

「バツレヘムの馬屋の飼い葉おけが神の子の揺りかごであったように、[弟子たちが集まっていた家の] 二階は神の霊の揺りかごであった。『聖なるみ子』の来臨は、神が『その民を訪れ贖った』ことの証しであったように、聖霊の来臨も同様であった」<sup>56</sup>。この参照テキストに示されているゴードンの信仰思想は、「飼い葉おけ—キリスト」/「み霊—聖霊降臨日の二階」のひとつの予型論的歴史理解と呼ぶことがゆるされるであろう。

ii) み霊—キリストの救済過程（再生→聖化→栄化）：

a. 再生＝新生の必要性：「…しかし彼は死者のなかから復活し、彼の父の王座に座したとき、彼はその神秘体—すなわち彼の教会全体にいのちの付与者となるためであった。…座するキリストは、実際教会の心臓部であり、あらゆる再生（regeneration）は、聖霊によって上から誕生した魂におけるかの心臓の鼓動であった」<sup>57</sup>。ここで注目すべきは、ゴードンの救済論で特徴的なことは、「宗教改革的福音主義」のキリストの十字架と贖罪に基づく信仰による義認の強調が見られない点である。むしろ再生＝新生という復活と新生・再生を救済の出発点として強調されている。

b. 聖化：「…再生された我々も両性をもつ。一方はアダムに由来し、他方はキリストに由来し、われらの聖化（sanctification）は、二重のプロセス、（罪、死、律法を）殺すこと（mortification）と、生かされること

<sup>55</sup> Gordon, *ibid.*, 20.

<sup>56</sup> *Ibid.*, 20.

<sup>57</sup> *Ibid.*, 55

(vivification) …という二重のプロセスのうちに存在する」<sup>58</sup>。神人両性のキリストによる「聖化」は、古きアダムの罪・死・律法を「殺す過程」、他方はキリストに由来する「生かされる過程」の同時進行「聖化」過程であると喝破している。ここで興味深いことは、ゴードンの見解は、ギリシア教父や東方教会の教父らの潮流に似ている点である。

c. 栄化：「…聖霊は、その神的で内的な作用の意志によって、われらの内に神的類似性 (the Divine likeness) を形成し、われらに対して神的主権性をすでに完成させたのである」<sup>59</sup>。ここで、「神的類似性」の回復を栄化の中心に据えているのも、やはり東方教父への親近性を感じさせる。

### ③み霊—キリストの神秘体と終末における栄化のヴィジョン：

i) 近代的自発結社型教会観批判と「み霊—キリストの神秘体」の形成：「…しかし今やひとつのエクレシア…が、キリストの神秘体—頭なる彼の内に組み入れられて、聖霊を通じて彼〔キリスト〕により内住される—を形成せねばならなかった。われらが時折耳にする定義—教会は『信仰者たちの自発的結社で、礼拝と教化のために結合されている』—は不正確とは言わないまでも、非常に不適切である。…」<sup>60</sup> このゴードンの発言で注目すべきは、二点ある。第一に、彼にとって教会とは、個々人の主体的信仰を持ち寄って「伝道と礼拝のために」結成される近代的な「自発的結社」ではないと明言していることである。第二に、教会とは、頭なるキリストからみ霊の命が注入されている、客観的な「キリストの神秘体」である以上、所属者が肢体として頭なるキリストに向かって成長させられることが、その倫理的な課題となる霊的な有機体なのである。

ii) 「み霊—キリストの神秘体」の統治と近代的教会会議主義批判：

そこでゴードンは、上記の真理を次のように強調する：「〔使徒言行録 20:28 を引用して—棚村〕明らかに、最初の監督たち、ないし牧師たちは、会衆の投票によってではなく、神のみ霊によって与えられたのであ

る」<sup>61</sup>。つまり教会員の個人主義的権利としての投票による民主主義によって、教会の「監督たち、牧師たち」を選挙するのではなかった。反対に、上からのみ霊の働きだけが、こうしたキリストの神秘体に奉愛仕する監督・牧師を立てるのである。近代主義バプテストへの批判であろう。

iii) 終末の到来と、み霊の昇天によるキリストの神秘体の恍惚と栄化：

「…彼〔み霊〕は、世界におけるその時間的使命を成し遂げられた暁には、彼ご自身のために形成された身体において—あの『一人の新しい人』、この配剤時代の中に、ユダヤ人と異邦人たちから集められ、再生された教会において天へと戻っていくであろう。というのは、使徒によって預言された諸聖徒らの恍惚 (ラプチャー) とは何であるかが〔肝心で—棚村の補い〕ある。トランペットの音と、義なる死者の復活において、『われら生きて残っている者たちは、彼らと共に雲の中で抱き上げられて空中で主とお会いすることにならないか』(一テサロニケ 4:17) [と記されているから—棚村補充]。それは、天的なキリストと会うために上昇する地上的キリスト〔の神秘体—棚村〕である。…」<sup>62</sup>。驚くなかれ、終末の栄化の時に約束されている、聖徒らの「恍惚」は近代個人主義的なそれではないことである。キリストの地上的神秘体という「集合人格」的な「恍惚」経験を意味しているのである。あの「四重の福音」を説いたシンプソンの終末論は、やや悲観主義的な「再臨・千年王国前説」であったが、ゴードンには千年王国説への関心は薄く、救済史的終末論へ回帰を見せている点が、注目に値するであろう。

だが、あえてゴードン神学に注文をつければ、父なる創造者の配剤期 (the era of dispensation of God the Creator) の視点が十分に展開されず、父なる神の創造—新創造の視点も導入したうえで、バランスの一層とれた経綸的三位一体論的展望をもつ教会論の神学的著作であってほしかった。

b) まとめ：ゴードンの「現代的福音主義」神学の意義と評価：

<sup>58</sup> Ibid., 58.

<sup>59</sup> Ibid., 66.

<sup>60</sup> Ibid., 33.

<sup>61</sup> Ibid., 69.

<sup>62</sup> Ibid., 105.

i) A.J. ゴードンの履歴も、A.B. シンプソン同様、もはやフィニー時代の「地方都市とフロンティア」ではなく、歴史的な大都市ボストンという「産業社会化しつつある大都市での伝道」という社会的文脈の背景の変化を証明している。その意味で、時期的には、彼は「現代的福音主義」展開の時代に入っていると言えよう。

ii) ゴードン神学は、福音伝道や信仰復興の課題と共に、大都市と産業社会固有の「疾病」の癒しや、社会的ミニストリーの展開の必要性も、シンプソンらと共有していた。だが急進的アルミニウス主義救済論の影響を残すシンプソンと異なり、ゴードンは、『み霊の務め』のような並々ならぬ聖霊論—教会論的神学関心をもって、自らの信仰思想を表明している。だが、まさにその点で十九世紀後半の北米「現代的福音主義」の進展をめざすだけでなく、ヘブル聖書的一古代教父的な「高教会」神学の再撰取の方向を斬新に打ち出している。

iii) だから、ゴードンの北米神学思想上の貢献は、フィニー以来シンプソンまで続いてきた「スコットランド常識哲学」流の道德主義・「急進的アルミニウス主義」救済論に立つ個人救霊的で、教会論なき伝道論・信仰復興論の欠点を払拭した諸点にあらう。その意味で、「近代後（ポスト・モダン）のロマン主義的・古代教父的—高教会（ハイチャーチ）的な神学」傾向を明瞭に打ち出している。それは、キリスト神人両性と受肉・贖罪・復活・昇天論を踏まえた「み霊—キリスト神秘体形成」神学をもって「近代的福音主義」の諸欠点を克服しようと試みた点にあらう。そこで、論者は、ゴードンを「北米の逢坂元吉郎」と呼ぶ誘惑を禁じえない<sup>63</sup>。

にもかかわらず、多くの問いは、残っている。「このようなゴードン

がなぜムーディーのノースフィールド会議に留まり得たのか」、「ゴードンは、その思想の発展において、そもそも福音派なのか、あるいはどんな福音主義者だったのか」、「この人の名を冠した神学教育機関（ゴードン・コンウェル神学校）は、このゴードンの『ハイチャーチ・バプテスト』神学をどう扱ったのか」、「この人の名を冠した神学校は、今ゴードン神学の全貌をどう教えているのか」など疑問はつきない。

## V. おわりに：南北戦争後の北米の「近代的福音主義」から「現代的福音主義」への変容の意義：日本のキリスト教会でも並行現象はあるのか？

1) 顧みれば、十九世紀後半の北米の南北戦争後に、フィニー的な個人主義的・啓蒙主義的・道德主義的な急進的個人協力説の「近代的福音主義」が、二つの方向へ分裂した。第一は、シンプソンの「四重の福音」で、急進的アルミニウス主義の救済論を受け継ぐ。その半面、産業都市化の負の環境である病気の癒しや社会的ミニストリーへの関心を打ち出した。第二に、無論ゴードンも、病の癒しや社会的ミニストリーに関心はあるが、シンプソンと異なり、啓蒙主義や個人主義を脱し、ロマン主義的高教会主義の傾向を増大させた。「キリストの神秘体」と再生—聖化—栄化の救済を強調した点が斬新である。

2) 日本でも興味深いことに平行現象が現れた。片や、首都圏はじめ大都市伝道に全力投球した中田重治（1870-1939）は、シンプソン流の「現代的福音主義」の聖潔派の急進的アルミニウス主義救済路線を継続した人物であった。他方、旧日本基督教会の逢坂元吉郎（1880-1945）は、教父研究に立つロマン主義的な「古代教父神学」再撰取のなかで「高教会神学」の回復へと転向したケースと言えよう。

3) とすれば、今後の「現代的福音主義」の再建的・展開的方向性は、以下のプランを神学的に展開することであろう。①ゴードン/逢坂のような教会論回復の神学的営為を継承し、②ゴードンの古代教父的—東方教會的な「再生—聖化—栄化」の救済論を学ぶだけではない。更に、「宗

<sup>63</sup> 逢坂元吉郎（1880-1945）：東京帝大時代に植村正久から受洗し、やがて日本基督教会の牧師となる。留学後一時、社会派運動に走ったが、右翼から受けた暴行のために負傷し闘病生活を余儀なくされる。そのなかで回心し、古代教父神学研究や高教会運動の著作を研究し修道生活を実践し著作を著したが、第二次大戦末期に病没した。

教改革 500 年」を機に、ヘブル的聖書的—古代教会的—西方教会の伝統を継承している「宗教改革的福音主義」の救済論や教会論をも回復すべきである。つまり「(恩寵のみによる) 義認—(恩寵のみによる、あるいは、協働の恩寵による) 聖化」の救済論を取り戻すことが必要である。要は、「宗教改革的福音主義」救済論と、キリスト神人両性論の土台の上に立つゴードン/逢坂流のキリストの神秘体教会論神学の真摯な統合作業に神学的な営為が傾注される必要があると思う。この課題の教会史の見極めと遂行に関しては、もはや「主流派」プロテスタントも「福音派」プロテスタントも「共通の課題」を共有している時代へ入っていると言わざるをえない。

(注：本論考は、19 回ウェスレー・メソジスト学会で発表したレジメにもとづき、その後改訂と補充を行った、いわゆる改訂版になっていることをお断りしておきたい。)

(東京神学大学特任教授)